

ホトトギス

七月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別換承認雑誌第六二七号
平成三十年七月一日発行（第百二十一巻第七号）



風雅の小筈〔七〕

廣 太 郎

講演、というような偉そうな話はあまり出来ないが、時々頼まれて色々な場所では俳句に關してお話をさせて頂く機会が増えてきた。やはりホトトギス等の俳句關係の団体が關係したイベントで話す機会が圧倒的に多いのではあるが、最近テーマとして力を入れてゐるテーマは、このコーナーが始まつて最初に述べた、今後の結社の活性化という事で、昔日の、所謂結社の時代という時代を取り戻せる事が出来るのか、という事だが、これは俳句に携わる我々の問題で、今後の展開はそれこそ我々の努力にかかってくるのである。

そんな中、学生時代の友人のルートから、ある講演の依頼があつた。講演といつても、一つの会合の中の卓話として、三十分ほどの時間である。勿論私は人にお話が出来るといへば、これも満足という程でもないが俳句に關する事である。その会は基本的には俳句の集まりではなく、ビジネスマンの会合であつた。あまり俳句の専門的な話ではない方が良く、正しい、尤もそんな専門知識も持ち合わせてはいないので、日本人の自然に對する考え方、という事で虚子の「花鳥諷詠」について話した。勿論花鳥諷詠の理念的な事ではなく、つまり、この言葉は「花鳥」、つまり自然を「諷詠」する。俳句に詠む。この「花鳥」は自然だけではなく、人間の営みも含まれる。人間も花鳥（自然）の一部である、と申し上げると、これが甚く感銘された。やはり虚子の理念は現在も生きてゐると、意を強く持った有意義な会合に出席出来た日であつた。

句日記 汀子

平成二十九年七月一日 芦屋ホトギス会

世の中は魍魎魍魎や梅雨半ば
梅雨晴間縫うて旅路のありにけり

七月二日 下萌句会

月見草には夜の貌朝の貌
旬日に迫る三瓶の旅の夏
水音に触れて来し風涼しさよ

七月三日 ロイヤル併催

藤椅子に山の暮しのはじまりぬ
藤椅子のきしめば遠き日となりぬ
健康を取り戻され露涼し

七月八日 東海ホトギス俳句大会前日句会

梅雨晴間高速道路路空いてをり
快晴の旅路に梅雨の憂ひなく

七月九日 東海ホトギス同人会

夜の顔朝の顔ある鶴川かな
鶴飼果て夜の静寂の戻る川
梅雨の月満ちて犬山城下かな

七月九日 東海ホトギス俳句大会

よべの修羅失せて静かな鶴川かな
運転の心ととのふ梅雨の晴

七月十一日 大阪倶楽部

虹消えて思ひ出だけが残りをり
さくらんばいつかすつばくなくなりし
虹を見し旅路通の日々となる

七月十一日 綿業倶楽部

合歓の花咲けばめぐりて来る旅路
川風の涼しき旅もはや遠く
虹といふはかなきゆゑに美しく

七月十三日 清交社

涼風に助けられたるスケジュール
又虹を見そこなひたる家居かな
夏霧の深き山路も通ひ慣れ
川床に出ておくれやすてふもてなしに

夏霧や山の深さの計られず
雷に打たれし城と聞くばかり
水見舞明はぬ外出でありしこと
暑いとは言はぬ外出でありしこと

七月十四日 工業倶楽部

梅雨明の待たるる旅路なりしかな
虹の脚消えて湖畔の景戻る
水見舞電話通じし安堵あり

七月十五日 石見ホトギス俳句大会前日句会

三瓶にも汗の邂逅ありしこと
今宵星空を仰がん避暑ごころ

七月十六日 石見ホトギス俳句大会

時鳥ふたたたび三たび三瓶山
癒え給へ涼しき旅の心もて

七月十七日 地球ボランティア協会

海の日は地球を語る日と決めて
よべの星語る仲間と集ふ汗
一年の汗の活動語る会

七月十八日 有恒俳句会

遠き旅近き旅あり夜の秋
いつまでも生きて金魚とある暮らし
明るさを抱き夜の帳月見草
旅人に星見る今宵夜の秋

七月十八日 無名会

船祭見て看取りせし日も遠し
病院の窓をどんどこ舟通る
虫干の匂ひの中に帰り来し
虫干のつもりで床の軸替へし

七月十九日 夏潮句会

着ることのなかりし形見虫干す
梅雨明けしこと誰彼に告げてをり

七月十九日 紅梅会百号記念

百号を祝ふ涼しき心寄せ
お隣へ涼しき蔭を拾ひつつ
喜雨を待つなどとは言へぬ豪雨の地

何となく暑さの所為にしてしまふ
墨を磨る心涼しくなつて来し
七月二十一日 アネモネ句会

快晴のいつ雷雲の育ちしや

水遣らぬ仙人掌のなほ生きてをり
梅雨明けしことに心を許したる
雷雲の居座つてゐし空の果
アリゾナの仙人掌に娘を訪ひし日も

七月二十四日 木下圭子様に贈る

人の世の悲しみ癒えよ女王花
一本の電話涼しく受けとめし
涼しさや二た言三言よき報せ

七月二十七日 ときさらぎ会

歳月の過ぎゆく早き露涼し
誰彼の消息となる涼しさよ
手に溢れる涼しさもありぬべし
祈りとはいつか涼しき心生れ

七月二十八日 時雨句会

草いきれ隣に何か建つ気配
スケジュール加はるばかり汗の日々
汗拭いて考へ貧しかりしかな

七月二十九日 野分会夏行倉敷

遠くより参加せし夏輜ひぬ
倉敷は歴史ある街若き汗
こんなにも汗の笑顔の集ふ会

七月二十九日 第二句会

クイズにも興じたるより汗涼し
若き日を近づけてある夏の旅
歳月を語りて未来へ涼しき灯

七月三十日 野分会夏行

旅にあることを忘れて朝涼に
仕事から解放されしそんな夏
夏行とは早起き組と決まりをり

若者とは早起き組と決まりをり

この晴に雷予報出てをりぬ

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十九年七月一日 青嵐会青嵐句会

心眼で見える富嶽てふ夏の山
先づワイン次に麦茶が減る我が家
都議選の投票終へて梅雨に酌む

七月二日 青嵐会青嵐句会

夢売つて現実買うて夜店かな
七月四日 むさし野吟行会

三門を抜けて下闇木下闇
朝風や嵐近付く気配も
芝刈に大本山の目覚めゆく

七月六日 蕉心会

言葉とは時に凶器となる暑さ
鶴匠より逃れし一羽かも知れぬ
七変化先月よりは三変化

涼風や今日は陽のよく鳴く日
青空と梅雨空聞ぎ合ふ都心
鳥語聞く佳人黒日傘を傾げ

七月八日 東海ホトギス同人会 大会

露守し正俊さんと酌みし日々
天守てふ涼しき高さありにけり
緑蔭をはみ出してある天守閣り

十二代城主涼しくグラス登山
天守閣頂上までといふ登山
写生文作家で城主灯涼し

花合歓に木曾川夜を明け渡す
城灯に繩より涼風の囁きにけり

その中の疲鶴鳴いてばかりにけり
鵜舟去り川面笑顔を取り戻す

七月十日 朝日カルチャー草句会

日傘からぞます言葉の飛び交へり
月見草咲いて三瓶に星を呼ぶ
白銀も祓はれてある月見草

黒日傘差して墓碑銘読む女
七月十三日 土筆会

昨夜星の精を宿してお花鳥
ドームより精の香運び来たる
思案して結局飛び度かな

炎天を弾くドームの角度かな
ダイエツとしてより汗と決別す
七月十四日 浜田吟行会

山陰に解く山陽の暑さかな
東は空梅雨西は男梅雨
白涼しの石見大崎鼻灯台

鳴くもの樂となりゆく木下闇
涼風蘭に搦め捕られし一古木
涼風の生まるる城の木蔭かな

七月十五日 石見ホトギス俳句大会

空の蒼海の青三瓶の緑
稜線に梅雨の青三瓶の緑
カレイ組より三瓶蕎麦組涼し

七月十八日 北國文芸連吟吟

老鶯の筋に三瓶目覚めゆく
七月二十日 登高会

ハンモック吊りて山荘朽ち果てし
滴滴りて大河一本出来上る詩
夕顔や光源氏の世を遠く

七月二十日 「ウェブ俳句通信」出句

再会の美人女将と夕涼み
木下闇羽音もどこか異界めき
夏蝶の黄が灯台を守る岬道

風蘭に迎へられたるより浜田
風眼で見る姥百合と天守閣田
緑蔭の広さは城の歴史かな

城山の高さは祭太鼓聴かな
万緑の丘に潰されるかに城址

花合歓の一輪に山開けゆく

偲ぶ人案ずる人に三瓶蕎麦
沙羅の戸を潜りて啜る三瓶蕎麦
昨夜髪を洗ひて花合歓句碑を馳せ

光年のここに尽きたる星涼し
黄の花を点描として大夏野
時鳥に風猫の囁き友として

夕顔に黒猫の目きの光りをして
ハンモック胸にはヨハネ福音書
七月二十三日 青嵐会東京例会

国宝を身近にしたる晩夏かな
空蟬にピルルの谷間選びて蟻
アスファルトの継目選びて蟻

白玉の色に砂糖派会始まれる
その橋を渡り切るより帰省かな
その中に猫の定位置夏座敷

七月二十五日 若水句会

帰省して知り合ひたる娘今嫁に
箱庭の端の彩りや青唐辛子
箱庭の土に蘊蓄ありや青唐辛子

七月二十六日 目黒学園句会

箱庭の端の彩りや青唐辛子
箱庭の土に蘊蓄ありや青唐辛子
竹夫人足が絡んでゆきにけり

紡績の哀史を秘めて薦けしる
夏柳揺れて町並揺らして生れり
白壁に吸ひ込まれしゆに蠅生れり

源平の世を近づけて吉備晩夏
江戸と吉備繋ぐ涼しき鉄路かな
灯涼しきイダる君や露涼し者

造り滝音に詩人の集まりも涼し
その奥もその奥も露涼し者
青葉行果つもう来年の闘志も

青葉行果つもう来年の闘志も

雑詠 廣太郎 選

雛の軸かけ飾る日を待つてを 福知山 吉田節子
 雨水には雛出すならひ守りたる 同
 蔵の戸の古き音たて雛運ぶ 同
 祖父米寿息子定年孫卒業 東京 大久保白村
 定期券数日残し卒業す 同
 軽くても重き卒業証書かな 同
 春泥をつけ制服のアルマーニ 神戸 藤井啓子
 虚子館に定員はなし山笑ふ 同
 貝釘ひとつひとつに春灯 同
 疾走のポルシェ陽炎かき立てて 東京 田丸千種
 春障子閉てて茶室を闇とせざ 同
 彼岸道上_ミと下_モある珠数屋町 同
 灯ともりてかまくらふつと軽くなる 龍ヶ崎 今橋眞理子
 かまぐらの途切れて青き闇となる 同
 くきくきと枝ほつほつと山茱萸黄 同
 滝ノ奥にも冬暖の二三日 神戸 後藤比奈夫
 紅梅に日々白梅に夜毎かな 同
 書初の落款を捺し損ひし 同

梅が香にして日向の香日蔭の香 同 和田華凜
 梅園に逍遙学派哲学者 同
 まづ男神降り立ち給ひ御神渡 同
 去年今年吾はいつまでも日本人 熱海 嶋田一步
 生き残り来しこと多し歌留多取る 同
 医者の手につくづく老いし歌留多取る 同
 白鳥の首もう我に気付きたる 同
 雪原の白白鳥の動く白 同
 白鳥の声する闇に目を凝らす 同
 根元から大きく風の花菖蒲 東京 今井肖子
 紫陽花に朝の水色昼の青 同
 形代にうすくと日の差し来る 同
 初日へと回る地球に立つてをり 相模原 木村享史
 去年今年つなぐ句帳の一ページ 同
 さつきまで雪女ぬし椅子濡れて 同
 廻るとき待春の魚となる 熊本 岩岡 中正
 戒めのごとくに天地冴返る 同
 鳥ご糸のふれたるところより物芽 同
 麦踏のいつしか消えてまた居りし 長岡 安原 葉
 野の光受けて麦踏む老一人 同
 世にうとくうかれず睡る寺の猫 同
 伐採の音浅春の響きあり 袋井 湖東紀子
 湖の今日は色無く冴返る 同
 人のおにあらざ日を恋ふ犬ふぐり 同

雑詠句評（六月号より）

土地人として初富士を見る二箇所 熱海 嶋田 一步

一步さんが熱海へ移られてから、どのくらい経っただろう。みずから「土地人」と言われるほど、熱海の地に親しみ、馴染まれている。その土地人ならではの、初富士を仰ぐ隠れたスポットがあるのだろう。それも二箇所である。その二つから見た初富士はどんなに素晴らしかったことだろう。（純也）

北海道から熱海に引越されて、もう長年経過した作者であつて、もうすっかり静岡県人として定着されているだろう。この県というより日本の代表的ともいえる富士山もすっかり親しい存在となつた。初富士を見る絶好のポイントの二箇所という作者の取って置きのある事が羨ましい。（廣太郎）

底冷やぶぶ漬け勧められ惑ふ 大津 石川多歌司

ぶぶ漬けは茶漬であつて、京の茶漬というのは上方落語の演目にもなつている。京都の家を訪れると、帰りがけ、履物に足がかかつている頃に「まあぶぶ漬けでも」。本当に茶漬を馳走しようというのではもちろんなく、一種の挨拶だ。落語の中では、大阪人が毎度これをやられて腹を立て、あるとき「はな頂きます」と再び上がり込むのである。

現在ではこんなことはないだろう。作者は、京都の訪問先で本当に茶漬を勧められたのだと思う。その時京の茶漬の話を心に浮かべられた、そのおかしみである。（霜衣）

京都人ならではのユーモアと言うべきであろうか、長居をし過ぎた客に、帰つて欲しい時に使う常套手段として「ぶぶ漬け（茶漬）でもどうぞえ」と勧めるのだ。実は「もう帰つてくれ」という意味である。何とも季節が切なく響いてくる。（廣太郎）

天地有情

初夢に妻が出て来し珍しく
 初夢の立夫が凶面引くわが家
 うかれざる猫の目何となくかなし
 珍客も不意に加はり句座ぬくし
 夜は宇宙旅行夢見て立つ案山子
 神の手の伸びて草の実生れゆく
 目の合へば雛と哀しみ分ち合ふ
 落款の足跡深し春灯下
 著ぶくれて後ろ姿の皆同じ
 二月礼者らしく真珠のネックレス
 わが齡と共に紅梅老いにけり
 疲れたる眼を下萌に移しけり
 虚の身に入り来る梅が香でありぬ
 ごりよんさん守り継ぐ雛よ道修町
 弟子はまだ無心になれず松手入
 大綿に囚はれてゐる生返事
 捨て置きし鉢の草萌にも気付く
 山笑ひ日ごと明るくなる窓辺

神戸 後藤比奈夫
 同 同
 長岡 安原 葉
 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同
 宝塚 水田むつみ
 同 同
 神戸 山田佳乃
 同 同
 同 浜崎素粒子
 同 同
 同 和田華凜
 同 同
 同 千原叡子
 同 同
 同 黒川悦子
 同 同

鳥の眼のかつと見開き寒波来る
 寒昴夢の中までもの書いて
 溝浚へしたるにほひに月の出し
 一天の星座ゆるがぬ初嵐
 海苔粗朶の辺りひとときは深き青
 春浅し予定立ててはまた崩れ
 お屋敷の月夜の扉を恋の猫
 夜の部のはねて余寒の銀座かな
 いつまでも俳句は鬪志老の春
 日課としプールには行け老の春
 人事とは裏のあるもの涅槃西風
 陵のあれば墳あり野に遊ぶ
 麦踏の無心を風の通り抜け
 麦踏を残して出づる島渡舟
 鳩の巢にしづかな鳩の脚細き
 ひらと来て明るき方へ黒揚羽
 ニン月や花舗に明るき花並ぶ
 横顔にさびしさ帯びし雛かな

熊本 岩岡中正
 同 同
 福山 竹下陶子
 同 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同 同
 東京 山田閨子
 同 同
 熱海 嶋田一步
 同 同
 神戸 三村純也
 同 同
 東京 今井千鶴子
 同 同
 同 今井肖子
 同 同
 同 高濱朋子
 同 同

心子選